



ER WATCH & SHOP MAGAZINE **ウォッチビート**

あのヒストリックデザインを纏って
オメガ・シーマスターが完全リニューアル!!

時計技術の深淵を探る
独立時計師の技

いま欲しいのはSSケースのフランク

デザインで差が付く
現行ムーンフェイス図録

Mens Brand
2005年7月号増刊
定価 **560**円
2005
JUL
VOL.17 **7**

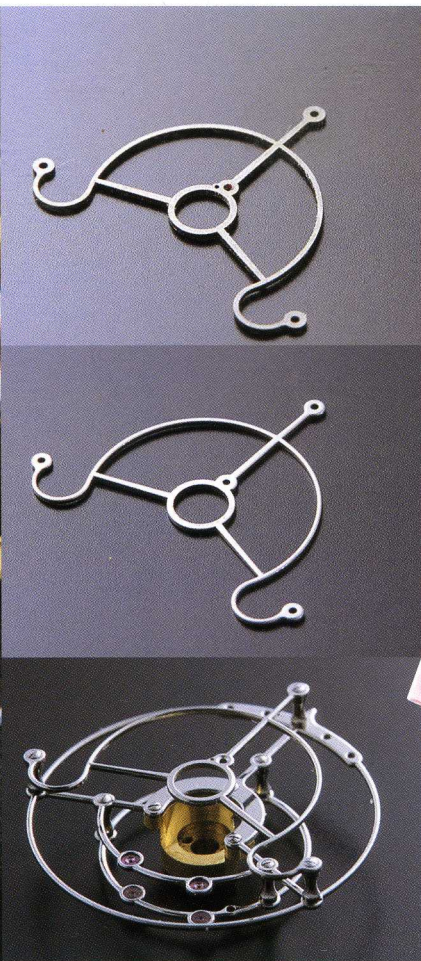
ROLEX SPECIAL ANNIVERSARY

100年分の ロレックス ストーリー

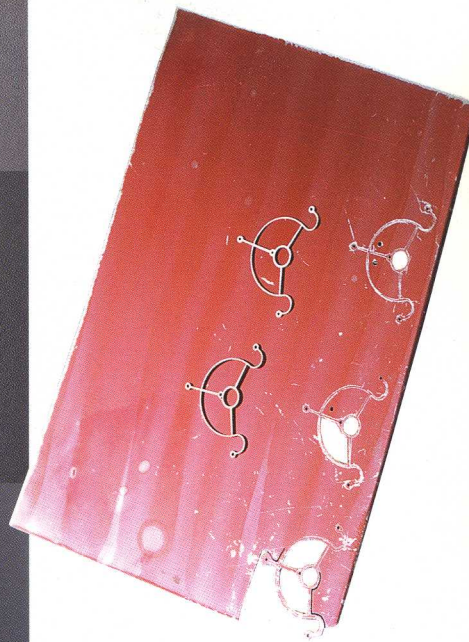


BASEL WORLD 2005
**バーゼル
最速情報**

ROLEX / OMEGA / BREITLING /
TAG HEUER / PATEK PHILIPPE /
AHCR / GLASHUTTE ORIGINAL /
de GRISOGONO etc



ハルディマン氏が作るH1のケージは銅板から糸ノコとヤスリで切り出され、丸2日を費やして1パーツが完成する。最終的にテンプがセッティングされた状態で、その重量は切手4枚分にも満たないのだ。オーバーコイルの巻き方も前ページのデュフォー氏のパーツとは微妙に異なっている点にも注目したい。



自らのイメージに忠実な造形を思い描くとき、時計師はパーツをすべて手で切り出す。機械仕上げでは到底到達できない、完璧なラインがそこにある。

「ここでインタビューのステージはル・サンティエからトゥーヘンへと移る。究極のシンプルウォッチがシンプリシティだとして、究極の複雑時計とも言えるH2レゾナンスをメイクしたばかりのハルディマン氏を訪ねるためだ。しかし今回の来訪の目的は、レゾナンスの精緻な複雑機構を解き明かすためではない。それは別の機会に必ずレポートすると約束して、今回のテーマを追求してゆきたい。デュフォー氏とは違

かな...? 加工前のスプリングは長いだろう。これを正確に巻いてゆくんだ。昔はヒゲゼンマイの構造そのものにも、専門のプロがいたんだよ。50歳を過ぎた女性とかね。今はいないな。クォーツの登場で一気に市場が変わった時代があっただろう。あの時にスイスは、自分たちに必要な技術を捨ててしまったんだ。それを現在になってまた拾い出した。最初は昔のレシ通過りに造っても丈夫なヒゲゼンマイが作れなかった。作り方そのものを捨て去ってしまった。いたからね。今はまた昔のクォリテイに近づいているけど、この美しいブルーの色味までは出せないな。」

「ここでインタビューのステージはル・サンティエからトゥーヘンへと移る。究極のシンプルウォッチがシンプリシティだとして、究極の複雑時計とも言えるH2レゾナンスをメイクしたばかりのハルディマン氏を訪ねるためだ。しかし今回の来訪の目的は、レゾナンスの精緻な複雑機構を解き明かすためではない。それは別の機会に必ずレポートすると約束して、今回のテーマを追求してゆきたい。デュフォー氏とは違

った理由でハンドメイドに拘り続ける氏の哲学、技法、そしてそのルーツを解き明かすためだ。「すべてを自らの手で作り上げる事に大きな意味があるのです。それに、少量のものを完璧に仕上げるには人間の手の方が有利でしょう。マスプロダクトと比較するには量産効果について考えなくてはなりません。コンピュータを使って、人間の手と同じ仕事をさせることも、きっと出来るでしょう。ただしそれには莫大なコストがかかります。どんな大メーカーでも、必ずミドルクォリテイで設定するのです。」

「これはすべて糸ノコで切り出して、ヤスリで仕上げてゆきます。切り出しに

「H1のケージを見てください。これをどう作るのか想像できますか?」そうしてハルディマン氏は、1枚の銅板を見せてくれた。きつと今回の取材のために用意してくれたものだろう。そこには鉄筆のケガキ線で描かれたケージの外形線がある。いくつかは大きめに切り出されてゆく過程だ。「これはすべて糸ノコで切り出して、ヤスリで仕上げてゆきます。切り出しに



ハンドカッティングでしか生み出すことの出来ないライン。それは鋭角的なエッジに表現されることが多い。美しく面取りが施されながら鋭くエッジが効いたラインは、ひとつひとつ手で切り出して磨き上げることでしか生み出せない。シンプリシティではアンクルにも同様の面取りが施されていた。

Capiter.4 HAND CUTTING ハンドカッティング

1日「磨きに1日かかります。私はH1でも、新作のH2でも2世紀の時計すべてに影響を与えるような作品を目指しましたが、複雑機構をデザインすることが大切なのではありません。ひとつひとつ手を動かしてメイクしてゆくことが大切なのです。」

氏の語るハンドメイドとは、最高のクオリティですべてを作るという意味だ。時計の伝統を学び、それを昇華させてゆくこと。それを氏は山の後ろから昇る朝日に例えて語る。山が伝統、そして山をバックにして新しいコンセプトが生まれてくるというわけだ。

「私にとってすべての時計のルーツは同じです。航海時計のジョン・ハリソンも、それぞれの地域で発展したフランスの時計産業も、生産業者が集中したジュネーブの時計産業も、私にとつては歴史のすべてが先生なのです。しかしそれだけでは自分が納得できるものは作れません。自分だけのイノベーションを持たなければなりません。」

ハルディマン氏がH1に使った「ニコル・ウィール」は、かつてパテック・カルペが懐中時計に用いたものだと言ふ。腕時計に用いられた例は極めて少ない。アトリエでも長く日が差し込む別室に設置された1940年代の切削機械は、そんな氏のハンドメイド哲学を象徴するものだろう。調整は恐ろしく大変だが、狙った精度が出せると氏は微笑する。ただし、これを用いるときは電話すらもすべてシャットアウトした完全な静寂を好む。

ハンドメイドされた道具（時計）は、決して劣化しません。道具は人々の集合体ですから、心を込めて作るものほど時を経て美しさが増すのです。」

2つのランプが完全に同調し、精度を維持する新作のH2の完成。その貴重な第1作目を手渡されて、その機構を覗き込み、言葉を失ふ。なんと言葉を返して良いのか解らない、それ





一方のテンプに固定されたバーは、センターを通り、もう片方のテンプ側に達している。このバーの両端にはフラットスプリングを受けるスタンドが設けられている。センターに設けられた2本のネジの間で細かく振動を繰り返すこのバーこそが、H2 レゾナンスのキーだ。レゾナンスとはその名の通り、片方のテンプが外力の影響を受けたとき、もう片方が同期（レゾナンス）して精度を維持する機構である。2つのテンプにはそれぞれ独立したガンギとアンクルが用意されているが、ガンギの中心には見慣れないヒゲのようなスプリングがある。このスプリングはガンギの回転方向を規制するワンウェイラチェットの役目を果たすもので、これがないとレゾナンスしないとハルディマン氏は語る。



アンティークの修復を多く手掛けてきたベアト・ハルディマン氏は'91年に独立。2年後にはマイスター上級時計師に認定される。時計が発する音を分析して往年のブレグ懐中時計のサウンドを再現したH1に続き、今年はH2を発表。バーゼルではデュフォー氏とも親しく言葉を交わす。

H2 Resonance

by
BEAT HALDIMANN

歴史の先に生み出された複雑機構
それをすべて自らの手で作り上げる



ハルディマン氏の2作目となるH2レゾナンスは、重力への2重の挑戦とも呼べる特殊なセンタートールビヨン。両端のテンプを繋ぎながら振動するレゾナンスバーを介して、2つのヒゲの収縮を同期させ、精度を補正し合う複雑機構である。
¥29,500,000(予価)

epilogue

ほどまでにH2のメカニズムは複雑で、理解を超えて、そして美しい。
「H2の機構ですか？ それはバーゼルまでの宿題にしましょう。ところで、いまH2を「覚」になって、大切なことを忘れていませんか？ そう、それは「今が何時か？」と言うことです。H1は本当に美しい時計です。H2には、そうですね、もっと理知的な、頭で考えるような美しさがあります。私のゴールは、美しすぎて「今が何時か」見ることを忘れてしまふ事です。」

この数日後にバーゼルワールドが開幕。我々のために「ブリスのバックヤード」を休憩スペースに提供してくれたデュフォー氏と再会する。例の悪戯っぽい笑みが、「何か解ったかい？」とばかりに語りかけてくる。
「機械仕上のムーブメントは遠くから見れば綺麗だが、手に持ったときにワクワクするものではない。シンプリシティは持つてみたらワクワクするだろう？ それは私自身がこの手に加えたものだ。」
失われてゆく伝統技術への警鐘、スイス時計の伝統を受け継ぐマイスター。氏を讀める言葉は数え上げればきりがない。しかし伝統を受け継ぐことよりも、氏が本当に作りたいと願ったベイビー、シンプリシティを生み出すにはこの手法しかなかったのだ。
「だって、機械じゃ作れないだろ（笑）」